

原発事故被害者 相双の会

連絡先

國分富夫（会長）

住所

〒976-0052

福島県相馬市黒木字迎畑 91-12

電話 090 (2364) 3613

メール kokubunpisu@gmail.com

事務局

鈴木宏孝 090-2909-6133（浪江）

関根憲一 090-4889-3726（富岡）

板倉好幸 090-9534-5657（南相馬）

結成から、まる 12 年

さようなら原発米沢 事務局

佐藤 淳二

市民団体である「さようなら原発米沢」は、2013年4月27日に結成された。福島第一原発事故による放射能災害は、16万人の人々を生まれ故郷からひき離れた。当時、米沢市にも3000名を超える人々が、福島県を中心に避難してきており、まさに混乱と喧噪の中での「会」の発足だった。結成総会には会員約100名が集まった。「原発に頼らない社会の実現、避難者支援と交流、全国の脱原発運動との連携」など、5項目の米沢宣言を確認した。代表の高橋寛（山形大学名誉教授）さんは「生き方を変える時が来た。福島の人々と連帯し、次の世代のために行動を起こそう」（河北新報'13.5.1）と挨拶し、満場一致で脱原発へ新たな第一歩を踏み出した。

あれから12年、7名の事務局を中心に、集会、講演会、裁判傍聴、現地視察等々月一回のつどいの開催をめざしてきた。コロナ禍での活動の中断があったものの、今日まで何とか73回の定例会を続けることができた。ちなみに昨年一年間の取り組みでは、4月の「木村真三氏・講演会」、6月の「鎌田慧さんと歩く下北半島のDVD上映と意見交換会」、そして10月には「丹治杉江さんを迎えるの講演会」であった。二つの講演会では、「福島の人々は今なお高線量下で長期被ばくを強いられている。13年経っても原発事故は決して終わっていない」現実を改めて学ぶことができた。交流を目的とした「会報ひろば」も45号まで発行することができた。また昨年は、始めて「行政に対する公開質問と要望」を取り組んだ。「高レベル放射性廃棄物（核のごみ）

の地層処分の受入れの是非」について質問した結果、米沢市長からは明確に「受入れる考えはない」との回答があり大きな成果だった。さらに戦後80年を節目に他団体と合同で「米沢平和都市宣言の広告塔の復活」についても申し入れを行なったが、当案件は残念ながら実現することはできなかった。しかし、いずれにしても活動内容を市民全体に広げることができたものと考えている。

ふり返ると、企画、運営、活動資金と試行錯誤の連続であった。それでもここまで継続できた原動力は、原発事故によって家族、仕事、故郷を崩壊させられた避難者・住民の怒り、無念さに対する私たちの共鳴であったと思う。

まもなく14年目の3.11を迎える。「福島 of 惨事を繰り返してはならない！」を再確認し、少しでも前進するため共に頑張りたい。

有志で、「毎月3日行動」を実施

以前、元・京大助教の小出裕章さんが、毎月松本駅前「アベ政治を許さない」のスタンディングを行っていることを知った。この行動に連帯できたらと考え、米沢でも有志による「毎月3日行動」が始まった。そしてちょうど3年が経過した。この間、「国葬反対」「ウクライナに平和を」「原発汚染水の海洋投棄反対」等、その時々の問題を手製のプラカードに託し市民に訴えてきた。市民の反応は、正直、無反応が多かったがそれでも「ご苦労様」や「車中から手を振ってくれる」と勇気と元気が湧いてく



る。ただ、汚染水の海洋投棄の強行前後にはお互いエキサイトする場面があった。ある市民は「処理水は安全だ。反対は風評被害を拡大し復興を妨げる」と強く抗議してきた。市民の対立と分断を煽り、国策を押し通そうとする権力側の意図を肌身で感じる一コマだった。

私たちの「3日行動は」不断の反原発運動とつながっている。今は無反応でも、私たちの声が大きく広がることで、いつかは必ずスクラムを組める日が来る。そのことを信じ、今月もまた街頭に立つ。

放射線被ばくの実態

飯舘村村民 伊藤延由

2010年縁あって飯舘村に入村し、村の人たちの協力で農民の経験ができた、当時66才、おそらく66年間で最も充実した一年間だった。

東日本大震災が襲ったのは、一年目の楽しさを二年目もと準備していた矢先でした、しかし、飯舘村の災いは3月15日夕方襲った放射能でした。前日に突如役場近くに設置されたモニタリングポスト(MP)が、44.7 μ Sv/hを記録したことに始まる、即ち通常の約1,000倍の値を示したのです。地震の震度は飯舘村も震度6強でしたが、倒壊家屋はゼロでした。

国は4月22日に至り被ばく量が年間20~50mSvを超えると避難指示を発し、一か月以内に全村避難するよう計画的避難指示区域に指定した。しかし実際に避難が完了したのは7月の仮設住宅の完成を見てからだった。計画的避難区域は、村内での宿泊は禁止されたが、日中の滞在は許可されていた。

原発立地自治体は、取る物もとりにあえず着の身着のまま避難したが、飯舘村は避難が遅れた。これを見ても原発事故の避難についての矛盾が浮き彫りになった。飯舘村は数軒の家が30km圏内にあるが大半は30km以遠に存在する。要するに原発から放された放射性物質はUPZ(概ね30km圏内)以遠は放射能が飛ばない?、放射能は自治体の境界で止

まる?。こんな中、私は事故後約14年間周辺の放射能を測り続けている。・・・・・・・・・・・・・・・・

1. 原発事故の大きさは被ばくのリスクの大きさ

約14年間福島県飯舘村を中心に汚染の実態を調査してきて思うのは「核災害(原爆や原発事故)の大きさは被ばくのリスクの大きさ」だと思う。

国は復興と称して除染に取り組んだ、被ばくリスクの低減が狙いだ、しかしその効果は限定的で事故前の放射線環境に戻るには300年余の時間を要する。

それは、除染の範囲が限定的であり未除染のエリアが大きいことによる、国が言う除染対象は、生活圈と言い宅地、農地、道路とそれぞれの境界から20mの範囲とされた。しかし村民にとっては山林・原野も生活圈であり豊富な自然の恵みの宝庫なのです。その結果除染面積は村の面積の16%、残る84%は未除染のままです。山林・原野などは1万~10万Bq/kgのまま、セシウム137の物理的半減期30年を10回(300年)繰り返して事故前の値に戻る、その間放射線を出し続け生物を汚染し続けるのです。

2. 初期被ばく

飯舘村の場合避難が3~4か月遅れた、その為に原発立地自治体と違う初期被ばくを浴びている。

表 1

名前	月別被ばく量(mSv)					合計
	3月	4月	5月	6月	7月	
伊藤延由	4.0	1.9	1.7	1.6	1.3	10.5

表 1 は、2012 年秋に開始された「飯館村初期被曝評価プロジェクト」による、伊藤の初期被ばくの評価値です。

このプロジェクトは京都大学複合原子力科学研究所(旧京大原子炉実験所)の今中助教が中心となり環境省の委託事業として実施されたものです。

3 月 15 日から 7 月末までの約 4.5 か月の値で、10.5mSv でした。

一般的に、日本人の被ばく量は年間 2.1mSv と言われますが、外部被ばくの値は630μSv/年程度[(公財)原子力安全研究協会「生活環境放射線」(平成 2 年)]です、この値は平常時の約 17 年分に相当します。

表で分かる通り 3 月は半月で 4.0mSv、4 月は 1.9mSv と 3 月の 1/4 以下、以降漸減しています、短寿命核種のせいと思われる。

ただ、この程度の被ばく量では事故直後当時の枝野官房長官が言った「直ちに健康に害をもたらすものでない」ようです。「直ちに」と付けるということは「やがてある」と言っていることに等しいのでは？

避難指示解除後の村内滞在被ばく 表 2

年	被ばく量 (μSv)	村内屋内		村内屋外		村 外		備考
		時間	率	時間	率	時間	率	
2017	1837.3	5,439.5	62.1%	266.0	3.0%	3,054.5	34.9%	
2018	1,636.9	5,568.5	63.6%	281.5	3.2%	2,910.0	33.2%	
2019	1,542.4	6,110.5	69.8%	215.0	2.5%	2,434.5	27.8%	
2020	1,573.9	7,078.0	80.6%	310.5	3.5%	1,395.5	15.9%	
2021	1,560.2	6,768.0	77.3%	375.5	4.3%	1,616.5	18.5%	
2022	1,384.7	6,655.5	76.0%	445.5	5.1%	1,659.0	18.9%	
2023	1,385.8	6,587.5	75.2%	504.5	5.8%	1,668.0	19.0%	
計	10,921.2	44,207.5	72.1%	2,398.5	3.9%	14,738.0	24.0%	

表 2 は、2017 年 3 月 31 日に避難指示解除(一部長泥行政区は 2023 年 4 月末に解除)された以降の私の被ばく量です。

個人線量計 PDM-122B、PDM-501 を腰高の位置(高さ 1m)に装着し毎日の被ばく量を所在場所別に時間を測り、村内屋内、村内屋外と村外の滞在時間を集

計したものです。

村内は 2016 年 12 月に除染が終わり、村の被ばく目標 5.0mSv/年間以下となったので避難指示を解除した(国の避難指示解除の値は年間 20.0mSv 以下とされたが、飯館村は独自に年間 5.0mSv の値を設定した)。

測定していて奇異に感じた事は、原発事故が起こると屋内外で被ばく線量に大きな差異があるということ。家屋の遮蔽効果よるが、村外での測定では屋内外差を感じることは無かった。

表 2 で分かる通り屋外作業が 7 年間の平均で 3.9%、本格的に営農再開や林業再開が進めば被ばく量は 2 倍、3 倍になる事は確実である。

注目頂きたいのは、初期被ばくとの比較です、**避難指示解除後 7 年間の値と事故直後 4.5 か月の値が同じ程度の値**であることです。

ここでも如何に初期被ばく量が過大なものだったかを表しています。

4. 語られない被ばくのリスク

事故直後村は、**妊婦と子どもは速やかに避難**するように指令を発した、しかし混乱の中正確に伝わらなかった。

私の知る限りでは、近くの小児、学齢期の子どもがいる家庭で避難しなかった家庭を複数見ている。「妊婦と子どもの避難」の指示は出たが、「**何故避難しない**

といけないのか?、避難しないとどうなるのか」が語られることは無かった、その結果、避難せず自宅待機していた。

飯館村の 3 月中旬は真冬、この時期「避難」のワードで思いつくのは「プライバシーもない体育館で雑魚寝」です、一方村内では五感に感じない放射能、放射線だから“危険”を感じない、昨日の千倍の空間線量率でも昨日と

今日の違いを感じることは無い。寒い体育館に避難するよりも自宅で炬燵で過ごす選択をするのが正しい選択だろう。

その時、放射線のリスクは妊婦、子どもは高いこと、将来の健康被害の確率が高まることを話せば親の選択は子どもたちを被ばくのリスクに晒さない事を選

ぶはずである。

その後、被ばくのリスクを語らないケースは多々見受けられる。

村のお知らせ版で「村内の自生の山菜・茸は食べないで下さい」この時も何故食べてはいけない？、食べるとどうなるか？が語られることは無い。

数万 Bq/kg の茸や山菜を食べても、味が変わるわけでもない、匂いがするわけでもない。実は結構食べている方がいるようです。知人は「俺は事故前と同じ食生活する」と宣言して過ごしている、内部被ばくを測るにはホールボディカウンター(WBC)で測るがその値は 25,000Bq を示していたそうだが特に体調に異変をきたしていないと言う。

村からは、「村内産の薪は燃やさないで下さい、市販の薪を燃やして下さい」とのお知らせが出るが、ここでもなぜ燃やしてはいけないのか？、燃やすとどうなるのか？を語らない。

避難指示解除にあたっては同様に、「住民が戻りたいと言うから除染し避難解除する」と、言うが、被ばくのリスクは一切語られることは無い。20mSv 避難解除を時間当たりになると 3.8μSv となるとして、それ以下だから解除するとの態度である、事故前の空間線量率は概ね 0.04~0.05μSv/h 程度だった。

被曝のリスクを語らずに村に戻りたいかと問われれば多くの人は「帰りたい」と答える。しかし、戻った先での被ばくのリスクは自己責任だ。将来発生する健康被害の可能性についても一切語ることは無い。

原発事故からの復興はない、明らかな官製被ばくです。被ばくのリスクを国が語らないのであれば、自らが学び自らを守るしかない。起きないはずの原発事故が起きた、福島後の我々が取るべき道でないか。

獨協医科大学 准教授

国際疫学研究室福島分室室長 (2025 年 4 月より放射線衛生学研究室に名称変更)

博士 (地球環境科学) 木村真三 先生からのコメント

最近、スウェーデンの研究者であるマーチン・トンデルさんらのグループが、非常に興味深い論文を発表しました Tondel,M., Environmental Epidemiology (2023)7:e277)。彼らのグループは、外部被ばくと汚染地域での食品中に含まれる放射性物質を摂取することによる内部被ばくの両方を評価できる線量測

定法を開発し、臓器ごとに 1 ミリグレイ (対象となるセシウム 134、137、ヨウ素 131 なので 1 ミリシーベルトと考えて良いでしょう) の被ばく当たりの発がんレベルについて、疫学的 (ざっくり言うと病気の発症原因を統計学的手法により求める学問) な検討しています。詳しい説明は書ききれないので、伊藤さんの被

ばく量に関して重要な点のみを示すことにします。彼らは 60 歳以上でも、放射線による発がんリスクは上昇することを明らかにしました。また、男性では結腸、膵臓、胃がんのリスクが上昇、女性では、リンパ腫のリスクが上昇するといえます。子供だけでなく、程度の差こそあれ、全年齢で気をつけなくてはなりません。

以上

身の回りの放射線 自然からの被ばく線量の内訳 (日本人)		
被ばくの種類	線源の内訳	実効線量 (ミリシーベルト/年)
外部被ばく	宇宙線	0.3
	大地放射線	0.33
内部被ばく (吸入摂取)	ラドン222 (屋内、屋外)	0.37
	ラドン220 (トロン) (屋内、屋外)	0.09
	喫煙 (鉛210、ポロニウム210等)	0.01
	その他 (ウラン等)	0.006
内部被ばく (経口摂取)	主に鉛210、ポロニウム210	0.80
	トリチウム	0.0000082
	炭素14	0.01
	カリウム40	0.18
合計		2.1

伊藤さん用の日本人の被ばくの内訳